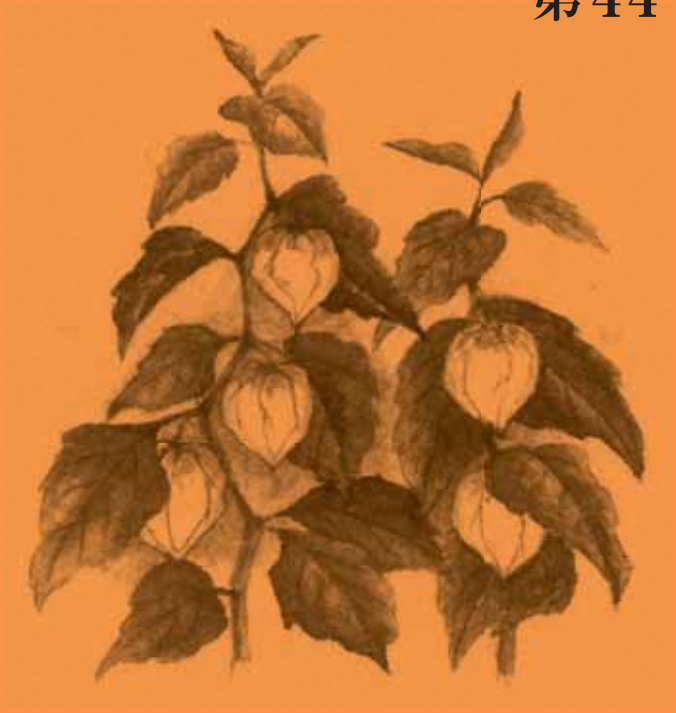
文芸おぢや

第44号



文芸おぢやの会
小千谷市

文芸おぢや第四十四号　二〇二四年発行

はじめに

小千谷市長　宮崎悦男

『名月や池をめぐりて夜もすがら（松尾芭蕉）』

紅や黄に色づく木々がひときわ鮮やかに彩りを見せる実りの秋を迎えました。芸術の秋、食欲の秋、スポーツの秋など、それぞれの秋を満喫していることと思われます。

特に秋は、美しい自然の彩りや実りに触れ、日常の小さなことにも季節の移ろいを楽しむことができます。自らの感性を豊かにする良い機会となることでしょう。

さて、今年もここに伝統ある「文芸おぢや」第四十四号が、関係各位のご努力とお寄せくださった皆様方の熱意により発刊の運びとなりました。

応募作品は、最年少十四歳から最高齢九十三歳までの幅広い年齢層の三三八名の皆様から四部門合わせて八七五点もの力作を寄せていただきました。作品を寄せてくださる皆様方の篤き思いに感謝するとともに、脈脈と流れる「文芸おぢや」への愛着と誇りを感じます。どの作品にも応募された方々の感性が豊かに表現されていて、大変素晴らしかったです。

なお、今回は市長賞・教育長賞・公民館長賞を選定していただき、入選された一六〇点を掲載いたしました。応募された皆様自身のこれからの作品作りに生かしていただくとともに、本誌を手にされた市民の皆様から、文化や芸術などへの興味や関心を今以上に高めていただき、「文芸おぢや」の応募へとつながることを期待しています。

そして、長年続いてきた「文芸おぢや」が、今後も大勢の皆様の投稿で作り上げられ、発刊を重ねた誇りある文芸誌として末永く愛されることを願っています。

結びになりますが、この発刊に当たりまして、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に心より御礼を申し上げ、併せて私の稚拙な一首を記して序といたします。

秋の夜実り豊かな作品を心和ます憩いの時に

令和六年度「文芸おぢや」第四十四号入賞者

短歌の部

市長賞　渡邊智子　岩沢

「廃校へ続くこの道思い出も覆い尽くして葛の花咲く」

教育長賞　白藤巳玲　埼玉県

「手にそっとゆらぎのありて燃えつきる間際を賑わう線香花火」

公民館長賞　関泰邦　土川二

「滑落し両手を折りしあの人はショートカットがキラキラ似合う」

俳句の部

市長賞　桑原　稔　神奈川県

「東京は積み木の細工雲の峰」
「秋蝶の影落としゆく沼の碧」
「黒南風の裂け目少年鼓笛隊」

教育長賞　高瀬　さえら　東京都

「方言はすっかり消えて帰省の子」
「太陽をひっくり返す錦鯉」
「葉の撓みは命の重さ蝉の殻」

公民館長賞　月野　うさぎ　船岡三

「もうラタトゥイユにするほかないトマト」
「すててこの夕風に抱く赤子かな」

選考基準　得点は合点とし、同点のときは特選の多い方を上位としました。

川柳の部

市長賞　松本　宿　兵庫県

「豊作は愛した土の恩返し」

教育長賞　天王谷　一　徳島県

「カタツムリ随分高く登ったな」

公民館長賞　阿部文彦　神奈川県

「擦り減った靴がふる里ばかり向く」

詩の部

市長賞

大江　豊　愛知県

「柿の木のある家」

【応募作品・応募者数】

短歌	一四七首	七五人
俳句	四〇一句	一三八人
川柳	三一一句	一〇九人
詩	十六編	十六人
合計	八七五点	三三八人

目次

はじめに……1
短歌の部　入賞者……2
俳句の部　入賞者……3
川柳の部　入賞者……4
詩の部　入賞者……5

短歌

田宮　朋子　選……7
小島　なお　選……9
松田　愼也　選……11

俳句

神野　紗希　選……13
髙田　正子　選……16

川崎　陽子　選……19
山本　浩　選……22
吉原　幸男　選……25

川柳

山倉　洋子　選……29
山﨑　草太　選……31

詩

八木　幹夫　選……33

編集後記……42

表紙絵・挿絵　佐藤由雄氏

短歌

特選

田宮朋子選

廃校へ続くこの道思い出も覆い尽くして葛の花咲く　　岩沢　渡邊智子

（選評）　この廃校は母校だろう。道の脇には葛の葉があたりを覆い尽くすように茂り、花が咲いている。「思い出も覆い尽くして」に卒業してからの年月が出ている。少子化が進行して廃校が増えた。

あの日からずっと日記は白いまま治りが遅い心のキズは　　埼玉県　関根一雄

（選評）　心に傷を負ってから、日記を書く気がしなくなった。どういう傷か不明だが、すぐに治る傷ではないらしい。「治りが遅い」と客観視しながらも、日記は白いままで、心の空白を埋められずにいる。

逢いたくて脇目も振らず駆けた道今では妻とのんびり散歩　　埼玉県　横手敏夫

（選評）　上の句は若いころのこと、下の句は現在のこと。逢いたかった人と妻は同一人物と思われる。同じ道だが、脇目も振らず駆けた昔と、のんびり散歩する今が対照的である。時間の奥行が出ている。

佳作

街灯に飛び来る虫を暗きより狙いて過る蝙蝠の影　土川二　関　泰邦

ボンヤリと入道雲を見ていたら稲のかおりがムンムンとした　上ノ山四　江口静江

曾の孫と指切りげんまん明けやらぬくぬぎ林に兜虫追ふ　平沢一　吉澤義章

ロダン作「地獄の門」へ幼子がとことこ歩む炎天の下　東京都　野上　卓

あまたビルのみこむごとくのっそりと巨きな月が都心をのぼる　神奈川県　桑原　稔

クーラーを適切にかけろと言うけれどかけたら寒い切ったら暑い　大阪府　馬場和義

手にそっとゆらぎのありて燃えつきる間際を賑わう線香花火　埼玉県　白藤巳玲

この店のこのへぎそばがおいしくていつものようにたっぷり食べる　神奈川県　竹澤　聡

梅雨あけし朝に顔を洗ふときかすかにほふカルキの臭ひ　平成二　星野武二

今年また七夕にかける短冊に「結婚」と書き織姫を待つ　大阪府　馬場和義

特選

小島なお選

滑落し両手を折りしあの人はショートカットがキラキラ似合う　土川二　関　泰邦

（選評）　大事故に遭ったのに「あの人」は幸せそうだ。ギプスで不便だからヘアカットしたのかもしれない。健やかではつらつとした彼女の人間力が、不運さえも味方につけているようで魅了されてしまう。

折りかけの折り紙を折る指先でわたしが好きになるまで折るよ　愛知県　大江　豊

（選評）　縁を重ねて、角を揃えて。丁寧に折り紙を畳んでゆくのは、自分の感情に折り合いをつけるのにどこか似ている。どこまでも小さくなっていって、いつか自分を好きになれたらいい。

紫陽花は眼のある如くひらきをり心もひらき夏の夜は過ぐ　長岡市　安木沢　修風

（選評）　小花が寄り集って咲く紫陽花に灰暗くみひらく眼。ままならない心も夏の解放感にまかせてひらいてみる。繊細に変化する紫陽花の花の色のように、私自身も移ろい、変わってゆく予感に満ちて。

佳作

ロボットも猫も要らんとよたよたの母の独りをただただ見てる　福井県　光風　雫

手に持ちて知りし硬さよ八百屋にて枇杷を選べば初夏の始まる　愛知県　海神　瑠珂

平日の町のはづれにある蕎麦屋ふいに出交はす父親（おやち）と息子（せがれ）　長岡市　安木沢　修風

美爆音奏でる君の細腕にトロンボーンと同じミサンガ　山梨県　ルーキー

クッキーの香の幼な子よクレヨンが落ちた、取っての果てなき遊び　片貝町　佐藤弥生

終活の記事を読み終え犬小屋でけたたましくもこっちに来いと　神奈川県　やーくん

わき役に視線の向かうコンサートきりんの少女譜面をめくる　千葉県　山本　明

手にそっとゆらぎのありて燃えつきる間際を賑わう線香花火　埼玉県　白藤巳玲

自由欄チャンスとばかり愚痴を書く読み手の心折らぬ程度に　福島県　白瀬美智男

保護猫のコボが来ぬ日は心配で近所一周する万歩計　愛知県　位田仁美

特選

松田愼也選

廃校へ続くこの道思い出も覆い尽くして葛の花咲く　岩沢　渡邊智子

（選評）　母校は高台にあったのだろう。だが、そこに至る道は繁茂する葛にすっかり埋もれてしまった。花の美しさがその侘しさをより一層際立たせる。三句を「思い出も」としたところが秀逸。

手にそっとゆらぎのありて燃えつきる間際を賑わう線香花火　埼玉県　白藤巳玲

（選評）　線香花火は、燃えるに従い、蕾・牡丹・松葉・柳・散り菊と姿を変え、どこか人生を思わせる。「ゆらぎ」あり「賑わう」のは松葉段階のはずでここがやや気になるが、印象深い一首である。

わき役に視線の向かうコンサートきりんの少女譜面をめくる　千葉県　山本明

（選評）　演奏よりも、奏者の横に控える譜めくりの少女に魅惑されてしまった作者である。優美でどこか孤高を感じさせる少女に、作者はふとキリンをイメージした。「きりんの少女」との表現が素敵。

佳作

幼なき日友達皆が子の付く名妹は言いたり羨ましいと　片貝町　佐藤裕子

駄菓子屋で暗算披露する孫が毎日家ではじくそろばん　群馬県　金子歩美

ひと夏の線香花火恋終わる遠き故郷思いを馳せる　奈良県　浦城亮祐

茄子の肌むらさき錆びて山を負ふこの郷に早秋風の立つ　岩沢　谷内カツヨ

白衣着け看護尽くした紅顔も米寿間近の白髪の妻に　木津町　目崎政成

クッキーの香の幼な子よクレヨンが落ちた、取っての果てなき遊び　片貝町　佐藤弥生

判定に疑惑があるけどそう言えば疑惑だらけの議員や夫　大阪府　馬場鈴代

あまたビルのみこむごとくのっそりと巨きな月が都心をのぼる　神奈川県　桑原　稔

クーラーを適切にかけろと言うけれどかけたら寒い切ったら暑い　大阪府　馬場和義

そい寝した孫も今では社会人猛暑に耐えて今朝も出勤　片貝町　小野塚道恵

俳句

神野紗希選

特選

すててこの夕風に抱く赤子かな　　船岡三　月野うさぎ

（選評）　気軽なすててこ姿だと、夕風の涼しさも感じやすいだろう。くつろいだ格好に赤ちゃんを抱く穏やかな日常も全ては過ぎ去る。夕風のほのかな寂しさが、生の寄る辺なさを浮き彫りにもする。

松葉牡丹の花揺らしつつトカゲ往く　　土川二　関泰邦

（選評）　花の赤や黄と、蜥蜴の尾の青さと、夏の鮮やかな色彩がにぎわう。暑い最中に強く咲く松葉牡丹が日差しをさらに濃くし、蜥蜴の体をきらりと光らせた。命が健やかに出会い、すれ違う眩しさ。

妻が逝きタオルあまりし夏の暮　　徳島県　天王谷一

（選評）　ともに生きてきた妻に先立たれた後も、生活は続いてゆく。日々使うタオルの余り方に気付いたことで、実体を伴った現実として喪失が迫る。夏の暮れの陰影が、さらに悲しみを深めて切ない。

佳作

水底にピアスがひとつ星祭　神奈川県　しらが式部

カレー香るこども食堂涼新た　東京都　蛭田恒美

天の川戦禍の子らの寝るところ　徳島県　澤田典子

首筋に負う子の吐息星月夜　徳島県　澤田典子

もうラタトゥイユにするほかないトマト　船岡三　月野うさぎ

鯉池の泥の白きや雲の峰　埼玉県　泊雲

燕来るうちはこの街捨てられず　神奈川県　やーくん

遠足のドングリ芽吹く初夏の風　東京都　子負虫

秋蝶の影落としゆく沼の碧　神奈川県　桑原稔

黒南風の裂け目少年鼓笛隊　神奈川県　桑原稔

猛暑日や小千谷縮のスーツ着て　滋賀県　千代哲雄

母の日や良いことだけを書く手紙　富山県　折田祐美子

一周忌過ぎても庭の忘草　岩沢　渡邊智子

大夕焼わたしはここにゐていいか　徳島県　天王谷一

錦鯉おぢやの空のあおあおと　神奈川県　竹澤聡

高田正子選

特選

消印はパリ新涼のエアメール　　新潟市　岩渕伊織

（選評）　エアメールを受け取った。あ、パリからだ！　それだけで爽やかな風を感じるのは、待っていた手紙だからかもしれない。

夕刊をシャツに取り込む驟雨かな　　東京都　原田伸介

（選評）　雨、と思ったがそのまま郵便受けまで。だが思いのほか降ってきたのだろう。思わず夕刊をシャツの腹に潜らせて。驟雨は夕立のこと。

露の世のコンビニエンスストアの灯　　神奈川県　しらが式部

（選評）　夜道を帰って来て、コンビニの灯りにほっと息をつく。略さずにコンビニエンスストアと使った句、初めて見ました！

佳作

盆供養地酒一本ぶら下げて　元中子　斎藤ハルイ

水底にピアスがひとつ星祭　神奈川県　しらが式部

カレー香るこども食堂涼新た　東京都　蛭田恒美

実桜や上等兵の墓の前　魚沼市　佐藤捷司

ひまわりやまた青春と言って古希　広島県　水野英明

雨の日の噴水ちよつと悲しそう　神奈川県　しらが式部

太陽をひっくり返す錦鯉　東京都　高瀬さえら

もうラタトゥイユにするほかないトマト　船岡三　月野うさぎ

黒南風の裂け目少年鼓笛隊　神奈川県　桑原　稔

母の日や良いことだけを書く手紙　富山県　折田祐美子

数学の時間になると蒸し暑い　真人町　小泉晴之介

一周忌過ぎても庭の忘草　岩沢　渡邊智子

大夕焼わたしはここにゐていいか　徳島県　天王谷　一

雨に濡れ桜の色が溶けていく　真人町　渡邊紗耶

逆上りできて辺りの蝉時雨　本町一　西脇理作

特選

川崎陽子選

東京は積み木の細工雲の峰　　神奈川県　桑原　稔

（選評）　空から見下ろせばビルの乱立する東京はたしかに積木のように見えるに違いない。そこに生活している人間は何に見えるのだろう。慨嘆と少しのユーモアが凝縮されている作品。

救護所のナース借り行く運動会　　山梨県　ルーキー

（選評）　運動会の「借り物走」での一場面。必死で走る子供と手を引っぱられて一生懸命走るナース。子供と白衣姿のナースが生き生きと表現されているほゝえましい作品である。

風評というは恐ろし熱帯夜　　埼玉県　岡田孝道

（選評）　風評という目に見えない不正確で曖昧なうわさほど恐ろしいものはない。作者の経験からの作句であろうか？　その心中を寝苦しい「熱帯夜」という季語に語らせている二句一章の佳句。

佳作

盆供養地酒一本ぶら下げて　元中子　斎藤ハルイ

酒回し笑顔も回し盆踊り　片貝町　佐藤裕子

走ってる私を風が追いかける　真人町　佐藤初音

方言はすっかり消えて帰省の子　東京都　高瀬さえら

風涼し心に届く本を読む　片貝町　太刀川玲子

六地蔵の帽子傾く残暑かな　桜町　高橋千代子

真夏日や日陰伝いの乳母車　千葉県　変なお爺さん

じいちゃんと育てたトマト絵日記に　群馬県　金子歩美

秋蝶の影落としゆく沼の碧　神奈川県　桑原　稔

裏面は今無き店の名の団扇　埼玉県　岡田孝道

面倒な話はあとに夏料理　平沢一　横森宏子

郭公の声を寂しと郷の母　東京都　石川　昇

雨に濡れ桜の色が溶けていく　真人町　渡邊紗耶

幸せに暮らしています曼珠沙華　奈良県　浦城亮祐

葉の撓みは命の重さ蝉の殻　東京都　高瀬さえら

山本　浩　選

特選

六地蔵の帽子傾く残暑かな　　桜町　高橋　千代子

（選評）お寺や古い山村に行くと六地蔵様を見かける。仏教で、六道のそれぞれにあって衆生を救済すると云う六種の地蔵菩薩。昔は、自分を支え助ける信頼出来るものとして頼りにして来た良き時代。

すててこの夕風に抱く赤子かな　　船岡三　月野　うさぎ

（選評）我が村にしばらくこの光景を見ない。以前は何でもない普通の風景だったが、少子高齢化とばかり云って居られなくなって来た。若者に嫁がない、若い女性は嫁に出ない。この句の風景を見たい。

うらおもてある人と居る暑さかな　　新潟市　岩渕　伊織

（選評）長く生きていると裏表も使わなければならない事は終始あるが、あの人はと云はれるほどに使ってはいけない。裏表を使う人に良い人は居ないと思っている。暑さもさらに増す、何事も正直に。

佳作

万緑のはざま静もる山の村　　蕷生　関　省吾

秋祭マイク向けられ弾む声　　片貝町　山口　恵美子

吊し雛のごと風にゆれ葛の花　　蕷生　関　省吾

方言はすっかり消えて帰省の子　　東京都　高瀬　さえら

外手スリ火傷しそうな炎暑かな　　元町　島川　幸子

風鈴を吊り魚沼の風を呼ぶ　　栄町　小田島　ふみ

立ち枯れのキュウリ黄色にぶら下がる　　愛知県　大江　豊

母の日のメール一行「ありがとう」　片貝町　宮島さち子

山頂の詩碑に初秋の陽射しかな　本町一　関川洋子

石佛に何を問ふのか赤とんぼ　千谷　小池ヤス

話し込み水となりゆくかき氷　東京都　ふわりねこ

八十一踏ん張りどころ夏木立　奈良県　渡辺勇三

猫が腹見せて寝転ぶ立夏かな　広島県　黒飛義竹

天職と思へるナース爽やかに　片貝町　吉原幸男

青田道駆け抜けてゆく縄電車　埼玉県　木村隆夫

特選

吉原幸男選

消印はパリ新涼のエアメール　　新潟市　岩渕伊織

（選評）一通の航空便が、時空を越えてこの作者の手許に届いた。ウェーブでは味わえない感動が湧く。パリから日本へ届く日数は？　暑さをのりこえ、オリンピックを終えたエアメールが新涼の日本に届く。手紙にはどんなことが書いてあったのだろう。

バス遅れ腸煮える炎暑かな　　東京都　ふわりねこ

（選評）猛暑のバス停。日陰もない。こんな時皮肉にもバスが大分遅れている。いらいらが募り腸まで煮えくり返る。直接的に〝腸が煮える〟と言われると本当にそんな気になってしまう。本当に酷い夏だった。

八月の空どこまでも罪はなし　　埼玉県　相沢明子

（選評）八月十五日の終戦記念日を意識しての句か。人の争いは〝善と悪〟より〝善と善〟の争いが多いという。澄んだ青空のような、争いのない世界は願望でしかないのか。

佳作

角突きの牛の鼻息油照り　埼玉県　泊　雲

太陽が大嫌ひなり大蚯蚓　北海道　岡崎　実

五つ六つ道に俯せ柿の花　片貝町　太刀川竹之

生れしより親しき山河青嵐　長岡市　若月里の

東京は積み木の細工雲の峰　神奈川県　桑原　稔

蜩よ鳴け空に明りのある限り　川井　山本　浩

原爆忌被爆二世の悲劇あり　広島県　水野英明

爽やかや記者に答ふるメダリスト　福井県　小林陸人

滝音にがまんの膝が励まされ　埼玉県　関根一雄

機関区に貨車は集まり月涼し　愛知県　斉藤浩美

風に声あれば風鈴かもしれぬ　新潟市　酒井春棋

秋蝶の影落としゆく沼の碧　神奈川県　桑原　稔

新涼や陶土衝く音変はりたる　長野県　穂苅真泉

炎天下不毛の大地に投票す　東京都　ひなたわだ

葉の撓みは命の重さ蝉の殻　東京都　高瀬　さえら

川柳

特選

山倉洋子選

豊作は愛した土の恩返し　　兵庫県　松本　宿

（選評）　令和六年度「文芸おぢや川柳部門」わくわくしながら拝見、全作品それぞれの個性が暖かい小千谷の空気と共に伝わって参りました。この作品は、作者の全身から郷土への愛と、自分自身へのねぎらいと感謝、喜びに溢れて――――。特選はこの作品に申し分ありませんでした。

擦り減った靴がふる里ばかり向く　　神奈川県　阿部文彦

（選評）　何度も何度も戻ろうとした。帰りたかった。ふるさとの方を見ながら――。そんな時いつもふる里の山が自分の目の前に来てくれる。頑張れや―、すぐ正月だぞ―、親父もみんな元気だぞ―!!　あゝ俺は強かったはず、泣きごとは言わなかったはず。待っててな――!

青春の味を悟った八十路坂　　福島県　白瀬美智男

（選評）　この一片の川柳作品と出会ってから気持の中でさまざまな想いが浮かんでは消えてをくり返していました。この川柳を囲んで戦死した父の話へまで広がっていきました。戦後七十九年。小千谷文芸との縁を有難く感じました。私も八十路の坂を登っているところです。

佳作

幸せな人が言いたいことを言う　奈良県　渡辺勇三

法よりも親が泣くからしない事　福井県　光風　雫

感性を磨けば四季に詩がある　兵庫県　谷口修平

熱気球ふわりと舞った恋の町　滋賀県　千代哲雄

空き家からちいき食堂誕生す　群馬県　金子歩美

角突きのどちらの牛もたくましく　神奈川県　竹澤　聡

ハンカチも浴衣の柄も錦鯉　愛知県　カワセミ君

父の日に酒より嬉しい娘(こ)のメール　岐阜県　染川染幸

戻らない恋よ愛よヘソクリよ　大阪府　石田隆至

台風と祭りを連れて娘の帰省　広島県　黒飛義竹

山崎草太選

特選

カタツムリ随分高く登ったな　　徳島県　天王谷　一

（選評）　我が身をカタツムリに喩え人生を振り返って創られた句と鑑賞致しました。蝸牛を片仮名表記にされておられますので、まだ人生半ばの作者と感じます。家族と家系、所謂家を背負っての人生お疲れさまです。随分高く登ったじゃないですか、素晴らしいです。

法よりも親が泣くからしない事　　福井県　光風　雫

（選評）　作者は若者か高齢の親を抱えた中年層の方かと迷いながら鑑賞致しました。「法よりも」の上五に心を引かれ若者の句と私なりに判断致しました。現在は、誘惑による法に触れるような落とし穴が無数にあります。思い悩んだ時は親を泣かせない方を選ぶと決めた心根に感動致しました。

へぎそばをすするあくまでさりげなく　　神奈川県　竹澤　聡

（選評）　全てを平仮名表記の句、川柳の作句になれた作者と思いながら鑑賞致しました。小千谷名物の「蕎麦」を句材にされて、平仮名の十七文字が「へぎそば」を演じています。「あくまでさりげなく」が句をさらに盛り上げてくれています。

佳作

癌と知り強がる父の声ふるえ　東京都　須藤茂夫

長生きを恥と感じる高齢者　福井県　わっしょい

擦り減った靴がふる里ばかり向く　神奈川県　阿部文彦

真っ直ぐな線にならない人の道　福岡県　梅津皓童

慰めの言葉も無くて抱き締める　兵庫県　谷口修平

草を引く心の芯に鬼の貌　長野県　穂苅真泉

勝利者の宴のあとのかなしさよ　長岡市　安木沢修風

挫折するたびに深まる人間味　埼玉県　岡田孝道

一筋の道生きぬいて今がある　栄町　石坂信一

豊作は愛した土の恩返し　兵庫県　松本宿

詩

特選

八木幹夫選

柿の木のある家

愛知県　大江　豊

ふる里の庭のある家には
どこの家にも柿の木があった
二階建ての家は　ちらほら
村の家は平屋の家ばかりだった
お寺も　大屋根ではあるが
平屋のわたしらの家と変わらない
と　威張っていた

あの頃　二階建てであることが
どれくらいうらやましかったことだろう
数少ない友達の家にあがり込んで
二階の小ぶりの窓から　顔を
出し合ったことがあった

（みんな　どこを見ていたのだろう）
庭先の柿の木と顔を見合わせ
首を持ち上げて　そこから
みんなで見上げた　逆さの空が
どれくらい　わたしらを
持ち上げてくれたことだろう

だから　青葉が茂って
気づかないうちに　白い花を咲かせ
親指ほどの実のいくつかが　青いまま
（コガネムシやアブラゼミが集まって来た）
落ちて来て　忘れた頃に実が真っ赤に熟す
お年寄りの先生が言っていた柿色のその色で
お爺ちゃんもお婆ちゃんもお母ちゃんも
顔を見合わせ　Y字型に開いた細手の竹竿で
ひねって　その実を落とす

あの高みから　落葉樹の
柿の木は　夕焼けに染まって
ほっぺたが光って　背伸びしたものだ
平屋の母屋の屋根の辺りで　熟したその実は
ちょうど　友達の二階建ての家から
わたしたちを見下ろすように
顔を見合わせながら落ちて来て
木守柿ひとつになった

（選評）

かつて農家の平屋の庭には柿の木が必ず一本ないしは二本、植えられていて、たわわな柿の実は日本の原風景。大江さんは心の奥に二階建ての窓からの光景を淡々と描いている。「（みんな　どこを見ていたのだろう）」少年の目には当時どんな未来が見えていたのだろうか。この言葉は美しい詩句となっている。Y字型の細手の竹竿で柿の枝をひねる。今でもあの柿の木はふるさとにあるだろうか。なつかしい時間と空間が甦る詩である。

佳作

猫のニャア

神奈川県　やーくん

君はどこから来たの？
三毛猫の野良に聞いてみる
猫はニャア
別れが悲しいから
もう猫は飼わないと決めたのに

何処から来たの？
どうしてうちを選んだの？
お隣さんは猫が嫌いだって
知ってた訳じゃないよね
迷うことなくうちに来るなんて
猫好きの匂いがするのかな？
猫はニャア
仕方なく家に入れて戸を閉める

きみは女の子？
お母さんは野良ではなさそうだけど
何処で生まれたの？
ようやくお乳を離れたくらいかな
お腹空いた？
鰹節ご飯をあげるよ
猫はまたニャア

それにしても少し慣れ慣れしい？
前からうちの子のような態度
すこしは遠慮しないのかな
そうか
うちに入ったらこっちのもんか？
これが猫を被っているというやつか？

あちこち歩きまわって気に入った？
甘えてるのかな
すぐに家族になるんだね
床の間で優雅に仰向けに寝そべって

まるで無防備
いやいや
天上天下唯我独尊か？

猫はニャアといって
勝手口から出て行った
裏の木陰で立ち止まる猫と
眼と眼があった
ここ、いいうちだろ？
咄嗟に呟いた

（選評）
猫をいとしく思い始めると、どうやら堪らない思いがこみ上げてくるのが愛猫家の心理。かく言う私もその一人だが、ニャアの一言で何度騙されたか。その無防備な愛くるしさに作者もわざとだまされているところがいい。「ここ、いいうちだろ？」猫のつぶやきか。作者のつぶやきか。はっきりとはしないが、そこがいい。

父との会話

佐賀県　古賀 由美子

父と二人でお茶してるとき
父に尋ねたことがある
「なかなか親孝行できなくてゴメンネ」
父はさらりと答えた
「あんたが自分の子供たちを
一生懸命育てる
それが何よりの親孝行なんだよ」
その言葉にどんなに救われたことか
「うん。わかった
たいした母親じゃないけどがんばるよ」
見返りは期待しない親
次世代へつないでいく愛情
子育ては大変だけど
根底に愛がしっかりあれば
なんとかなると
楽観的に考えている

（選評）
父と娘の会話が成り立つのは娘が親になった時からかもしれない。「親孝行」をしてこなかったことを父親に謝る娘。父に「自分の子どもたちを一生懸命育てることが何よりの親孝行」だといわれ、見返りを期待しない無償の愛が大切だと学ぶ。

風に運ばれて

奈良県　浦城　亮祐

悲しいまま
寂しいまま
僕は風に運ばれて
そのうち落ち着いてくる

昨日公園に行った
小さな男の子がいた
遊具で遊んでいた
一人で遊んでいた
一人だけど悲しそうではなかった
一人だけど寂しそうではなかった

僕の気持ちは風に運ばれて
常に変化し続ける
風の中で時は流れている
風の中で僕は生きている

今日も公園に行った
小さな男の子はいなかった

気持ちを切り替えるとき
変化に期待を寄せて
昨日は気持ちの変化に驚き
今日は気持ちが洗われている

今まさに僕は風に運ばれた

（選評）
プネウマという古代ギリシャ語には「風、精霊、空気、霊気等」の意味がある。浦城さんは無意識的に風の霊感に誘われて存在の本質に触れたのでしょう。公園で遊んでいた一人ぽっちの少年。悲しそうでも寂しそうでもない。風に運ばれるということはそういうことだったのだ。

荷物を背負った子ども

東京都　芦田　晋作

生まれた時
あなたは
何も持たない赤ん坊だった

荷物を持たされたのは
物心がついた頃からだった

誰に持たされたものか
分かっているのに
あなたは
その人を
指さずず
また
ただ
荷物を持ち直しているばかりだ

伸び伸びと人生を愛し
校庭を駆け回る級友を横目に

重い
罪悪感や
劣等感を
持ち直す

荷物を下ろすことを知らないのだ

誰に持たされたのか
指をさすと
その人が困ると思っているのだ
その人に
何をされるか分かっているのだ

もう荷物は下ろしていい

その言葉が聴こえてくる時
子どもたちは
生きていてよかったと
荷物を
川に
放り投げるだろう

荷物がここまで連れてきてくれた

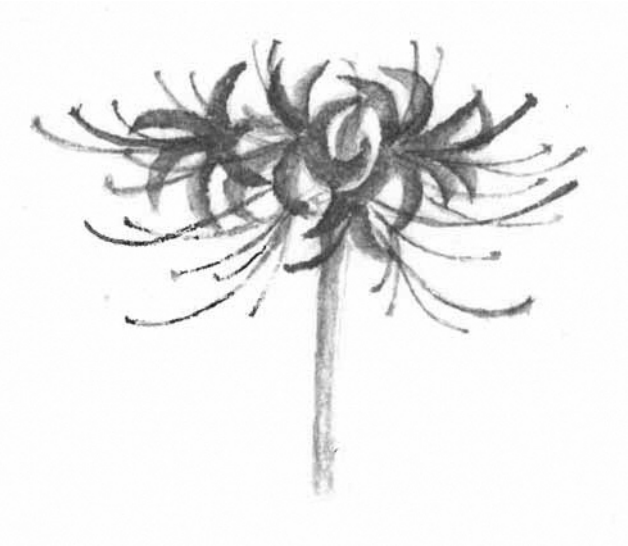
その言葉が聴こえてくる時
子どもたちは
荷物を背負った他の子を
優しく
見つめるだろう

もう荷物がなくても歩いていける

その言葉が聴こえてくる時
子どもたちは
川を流れていった
荷物のゆくえを
遠くに
見つめるだろう

（選評）

生まれた時、人は誰も何も持たない。物心ついたころから罪悪感や劣等感の荷物を負う。背負い続けてきた荷物をおろし、芦田さんは自分をようやく解放する。作品としてはもっと具体的な描写がほしいですね。



編集後記

今年はじめて担当いたしました。市内外から多数の皆様の作品をお寄せいただき、全体の大きなパワーを感じました。生活の一場面、人生のひとこまなどがそれぞれのお作の中に感じられました。紙原稿による応募とスマホなどから送信されたものが半々ほどで、老いも若きも集う短歌の世界を校正の仕事を通して目のあたりにすることができました。今後も多数の皆様からご参加いただければと思います。

編集委員　短歌部門　佐藤弥生

地元小千谷をはじめ県内外より文芸おぢやの俳句大会に応募していただきありがとうございました。

令和六年の夏は、暑かった。そして長かった。昨年も暑かったがそれ以上に暑かった。

夏が長い分秋が短くなって寂しい限りです。もう秋は、暦の上だけになってしまったのでしょうか？　暑い暑いと言っているうちに一年が過ぎようとしています。

ところで俳句の応募は、一人三句以内です。よろしくお願いします。来年も沢山の応募をお待ちしています。

編集委員　俳句部門　濁川靖子

川柳は人間を詠む文芸です。人間の本質はそれ程変わりませんが、人間の生活は時代によって変わります、そして川柳は生活によって変わります。固定的な観念に傾注せず、投句者の考えを柔軟に受け止めさせていただいたつもりです。但、文芸の一分野である川柳らしさも考慮させていただきました。

皆さんの心の揺さぶる一句一句に出会った事に感謝申し上げます。

編集委員　川柳部門　山﨑草太

詩情は煌めく炎である。赤く時に黄土色に耀き、静かに舞い上がる。明るくそして暖かく廻り周りを相照らし、永遠が何であるかを教えてくれる。詩情は激しく落ちる瀑布である。

一心にただ下を目指す。その飛沫は感動となって舞い散り、さだめなき無言の世界を表現している。今年も全国から、多くの詩が寄せられました。心から感謝申し上げます。次年度も多くの応募が寄せられるよう祈念いたします。

編集委員　詩部門　中山正則

今年も「文芸おぢや」第四十四号をお届けすることができ、安堵しております。審査員各位をはじめ、弊誌の発行にご尽力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

今年も従来からの郵送による作品応募に加えて、インターネットを通した入力フォームからの応募もあり、市内外から多くの作品が寄せられました。全国の皆様から注目され、小千谷市を知ってもらえるよい機会となっていることを感謝いたします。

今後も小千谷の文芸活動がますます発展し、多くの皆様から愛される文芸誌となるよう努めてまいります。

事務局　久保田千昭
新保有華
新保ひより

文芸おぢや　第四十四号
令和六年十一月二十四日　発行
発行　文芸おぢやの会
小千谷市
印刷　大川印刷株式会社